

XenosagaI・II - 第五話 浜辺 - Strand -

アンドリュー： うーううんー

???： 私たちの間に、愛情があったと思って？

???： ーごみ。

???： 貴様、みすみす部下を失って帰ってきたのか。

???： あんたーあんた、平気でそんなことができるのか！

アンドリュー： ー！

アンドリュー： ー

ー夢か。

ー！ うわあああああっ！

ー

???： ーシオン、シオン。

シオン： あなたはー

たしか、ヴォークリンデでもー

???： もう、間に合わないかもしれないー

シオン： あなたは誰？ 間に合わないって、いったいなにが間に合わないのー

???： どちらを選択するかは、彼次第ー

でも、あなたならー彼の最期の気持ちを理解してあげられるかも知れない。

シオン： 彼？ 最期の気持ち？

???： それが、彼にとっての安らぎー

シオン：――！

いまのは――？

ブリッジ

シオン：なにが起こってるの！

KOS-MOS：船体に対して、ハイパースペースの外部から、強い力が作用しています。

モモ：どういうことなんですか？

KOS-MOS：何者かが――私たちに接触しようとしています。

このままでは、通常空間に拘引されます。

ジギー：何者か――だと？

マシューズ：トニー、なんとかなんねえのか！

トニー：そんなこと言ったって、ロジカルドライブは全開なんだぜ！

ハマー：ダメだあつ、強制転移！ 逆らえないっす！

マシューズ：いったい、なんだってんだ――

トニー：とりあえず、エルザの機能には異状はねえな――

ハマー：あああああああああああああああああああああああああああああああっ！！

マシューズ：なんだ、うるせえぞ！

ハマー：こ、後方に――

グノーシスの大群！ 数――概算で 30000 超！

マシューズ：と、とにかく出せ、トニー！

トニー：アイサー、ロジカルドライブ全開！

シオン：KOS-MOS、超広域ヒルベルト展開！

KOS-MOS：了解しました。

モモ：すごい――アンブリファイアー装備のシステムでも周囲 100km が限界のはずなのに――

トニー：船長、舵が効かねえ！

マシューズ：んだとお！

ケイオス：重力場に異常、引き寄せられてる！

シオン：重力場――KOS-MOS、特定できる！？

KOS-MOS：おまかせください。

シオン：え、これ――

モモ： この感覚は――

KOS-MOS： 重力場の特定、完了しました。グノーシス郡の最後方――
全長 16,000km、超大型グノーシスによるものです。

シオン： 全長 16,000km！？

トニー： ダメだあつ、引き込まれる！

浜 - Strand - 辺

巨大グノーシス内 

シオン： うーん――ここは――？

ケイオス： 気がついた、シオン？

シオン： ケイオスくん――ここは？

ケイオス： さあ――たしか僕ら全員が光につつまれて、気がついたらここに――

シオン： モモちゃん、ジギーさんも――無事でよかった。

モモ： ！　ここは――

シオン： モモちゃん、どこだかわかるの？

モモ： この感覚――間違いないです。ここ、グノーシスの内部です。

シオン： グノーシスの内部！？

KOS-MOS： ――その通りです。

正確には、巨大なグノーシスのほぼ中心部に近い地点です。

先ほど報告した通り、このグノーシスの全長は 16,000km――

過去に観測されたこれほどの大きさのグノーシスは、” 聖堂船 ” と呼ばれるタイプのみです。

シオン： まさか――食べられちゃったの？

ケイオス： 状況としてはそれに近いかも――

モモ： 外のグノーシスの活反応は感じられません。まるで眠っているよう――

そうだ、エルザは！ 船長さんたちはどこに――？

ジギー：我々同様、どこかにいると思いたいが――

KOS-MOS：報告します。センサーに反応があります。

シオン：反応って、まさかエルザ？

KOS-MOS：はい、それとその近くにもう一つ。

微弱ながら、ヴォークリンデから奪われたゾハルの波形に酷似した反応を捉えました。

シオン：ゾハルって、格納庫にあった、あの金色の物体のこと？ それがここに――？

ジギー：エルザへの距離は？

KOS-MOS：ここから直線距離にして、約10km。

ジギー：近いな――

シオン：外は宇宙――アレンくんたちのことも気になるし――

ケイオス：うん、行ってみるしかなさそうだね。

――

アンドリュー：馬鹿な――これは夢の続きなのか？

？？？：――

アンドリュー：こいつらは――アリアドネの住人か？

？？？：――

アンドリュー：こ、これは夢だ。そうに違いない。ありえない、アリアドネはあのとき――

ゾハルの暴走事故によって、消えたはずだ――

？？？：――

――

アンドリュー：ま、まさか――お前たちは！

⇒ [サブストーリー3：アンドリュー篇2](#)

――

ジギー：聖堂船か――たしかに船の内部のような感じだ。

しかし、どう見ても連邦の船ではないようだな――

モモ：異星人の宇宙船でしょうか？

シオン：どうかしら——見て、あそこ。

ケイオス：なんだろ、なにかのプレートかな？

モモ：私たちの文字ですよ、これ。

シオン：でも、おかしいわ。

壁に刺さってるというより、これ自体が壁の延長として構成されているようにしか見えない——

モモ：それって、このプレートがグノーシスの一部ってことですか！ まさか——

ケイオス：周りをよく見て。このプレートだけじゃない。他にもたくさんある。

シオン：ここ、本当にグノーシスの内部なの——

？？？『急いで——彼が消えてしまう。』

シオン：えっ？ いまのは——

ジギー：なにか見つけたのか？

シオン：え？ う、ううん、なんでもないわ————

（また、あの子——いったいなにがあるっていうの、ここに——？）

—

シオン：どうやら中心部に来たみたいね。あれは——

ケイオス：建物、それともなにかの装置だろうか？

シオン：——どういうこと？

ケイオス：さあ、ただ——

シオン：ただ？

ケイオス：仮にここが中心部だとするなら、なんらかの形で、このグノーシスに関わっているもの——
——という考え方もできる。あくまで、僕らの基準に照らしてのことだけど。

ジギー：あれが人工物であるのなら、俺たちのように取り込まれた船か何かの残骸ということか——

モモ：人は——私たちも ああなっちゃうんですか？

シオン：そうなる前に脱出しましょう。KOS-MOS、エルザの位置は？

KOS-MOS：不明です、ロストしました。

シオン：ロストって——！

KOS-MOS: 中心部付近の磁場、重力場が不安定になってきている影響です。

13分前に探知した座標は、ここより下層300m程の場所です。

モモ: すぐ近くですね。行きますか？

シオン: ええ、この付近の残骸のようになっていないことを信じてね。

ケイオス: シオン、あれを見て。

シオン: ————ゾハル。

KOS-MOS: 行きましょう。

シオン: あ、ちょっとKOS-MOS!

ひとりで勝手に———もう、こんな子にした覚えはないんだけどなあ。

KOS-MOS: ————

シオン: それにしても、なんでゾハルがここに———

KOS-MOS: 照合の結果、この物体は確率99.99998%で

ヴォークリンデに積まれていたゾハルエミュレーターと同定されました。

シオン: エミュレーター? それって本物があるってこと?

KOS-MOS: そうです。

シオン: そうです——って、KOS-MOS、あなたどうしてそんなことまで知っているの?

メインバンクにはそんな情報は入っていないはずなのに——

アンドリュー: そ、そいつの開発者なのに——そんなことも——知らなかった——のか———

シオン: 中佐! 無事だったんですね、はやく脱出しま——

中佐、その身体——

アンドリュー: 脱出?

なにを言ってる。助かるとでも思っているのか? こんな状況で——

シオン: (中佐——?)

アンドリュー: ふふふ、まだ俺を解放してはくれんのか——

そうさ、お前たちの言うとおりだ!

シオン: 中佐、なにを——!

アンドリュー: そう、惑星アリアドネを消したのは他でもない、この俺なんだからな!

エミュレーターの確保ができればそれでよかったんだ!

そのために、軍もヴェクターもかり出された！

シオン：中佐！

ケイオス：ダメだ、シオン。君の言葉は聞こえてないよ。

シオン：じゃあ、誰の――

アンドリュー：そうさ、みな道化さ！ つまりな、なのに――なのに――う、うあああああ。

く、くるなあ！ 俺の――俺の中に入ってくるなあ！

お前たちが俺を拒絶した！ なのに今になってこの俺を！

や、やめろおーっ！

ジギー：なんだ！

シオン：な、なに、あれ――！

KOS-MOS：フォトン、レプトン、ハドロン、グラビトン――すべて反応ありません。

シオン：じゃあ、なぜ見えてるの？ あの光はなに！？

中佐！

モモ：この感じ――グノーシスです！

KOS-MOS：来ます！

ジギー：迎え撃つぞ！

シオン：でも、あれは――

ケイオス：あれはグノーシスだよ、シオン！

【 戦闘 VS ガーゴイル 】

シオン：これは――

――――

中佐の――心――？

マーグリス：見ろ、この眼下に広がる光を。かつて光は、文明――すなわち人の意志の象徴だった。

だが、いまここに見えているものはなんだ。

受け取り、消費することだけに耽溺し、自らを創造する意志を捨てた者ども

――そんな連中の澱んだ瞳が発する偽りの光だ。

シオン：（中佐と――誰、この人は――？）

マーグリズ：お前のかたわらを通り過ぎていった者どもは、人ではない。血肉が詰まっただけの単なる革袋だよ。
人は意志を持って始めて、人となりえるのだからな。
お前はそんな偽りの光を拒絶し、取り込まれることをよしとしなかった――
だからこそ、度重なる人格矯正プログラムを受け付けなかったのではないか。

シオン：（人格矯正プログラム――中佐が？）

マーグリズ：かつて人は、その故郷を捨てざるをえなかった。
――それは魯鈍な革袋どもが、その意志の灯火を消し去ったからだ。どうだ、アンドリュー。
この大地と星々、そのすべてに、人の意志の灯火を、ふたたび灯してみないか。
我らと――そして”我らの神”のために――

シオン：（――嬉しい
――嬉しい？ 私、いまそう思ったの？
違う、これは中佐の心――
中佐――あなたは、なにを求めているの――？）

シオン：中佐――――

アンドリュー：最初から存在しなかったのさ、俺は――――
三十六年前、やがてミルチア紛争へとつながる、ツォアル事変が起こった翌年だ。
俺は、戦争の道具としてこの世界に生まれた。
――よくある話さ。他社を破壊することが俺――いや俺たちの存在意義だった。
それに適応出来た奴は幸せだった。戦場で死ねた奴は、もっと幸せだったろう。
だが、俺にそれは訪れなかった。自分という存在になんら意義を見いだせないまま、
やがて戦争は終わり、俺は世界から取り残された。
――適応しようとはしたさ。だが、俺の言葉は、世界の言葉とは違っていた。
世界が俺を拒絶していると思った。司令は――そんな俺を必要としてくれた。
俺は司令の中に未来の自分の姿を見た。――いや、見たかったんだ。
だからなんだろう、俺が世界の言葉を話すには、常に薬の力が必要だった。
俺は、いつまでも”俺のまま”だったから――いまならそれが解る。俺が世界を拒絶していたんだ。
――――――

シオン——”ここ”はいい。ここには俺だけが存在している。他はない———

怒りも、哀しみも、喜びも、未来もない。

ただ——”自分がある”だけだ。その自分も、やがては溶けていく。——心地よい感じだ——俺は——

この感じを——求めていたんだ——シオン、やがてお前も——ここに来る。近い内に——きっと——

俺には——それが——解る——

シオン：——う——うう——

モモ：シオンさん——

シオン：今のは——中佐は——

ケイオス：—————

——シオン。

シオン：ねえ、ケイオスくん——なんだったの、いまのは？ 私たちはなにをしたの、ねえ！

モモ：ジギー、なにかあったんですか。

ジギー：——俺にも、わからん。

シオン：あれは本当に中佐だったの？ 教えて、ケイオスくん！ 私たちは中佐を——

ケイオス：シオン——真実を知ることが幸せとは限らないよ。

シオン：ケイオスくん——私たちも中佐みたいになるの——？

ケイオス：僕らはここにいる。グノーシスになってはいない。それは事実だよ。さあ、立って。

シオン：———うん。

ジギー：なんだ、この振動は？

KOS-MOS：事象境界面の結びが解けはじめています。

このままでは、この空間は消滅します。危険です。

ジギー：本当か！

モモ：あっ、見て下さい！ ——あそこ！

マシューズ『お〜い、姉ちゃんたち！ 生きてるかあ〜〜！』

アレン『主任〜〜〜んっ！ ご無事ですかあ〜〜！』

シオン：船長、アレンくん！

トニー『おっ、見つけたぜ！』

マシューズ『よっしゃ、カーゴベイ開け、収容するぞ！』

シオン：（シオン、やがてお前も――ここに来る

中佐の言葉は、いつまでも私の頭のなかに、響き続けていた――）

小惑星プレロマ 

オペレーター：――司令。

マーグリス：なんだ。

オペレーター：アンドリュー・チェレンコフ中佐の S. M. S. の識別シグナルが――消失しました。

マーグリス：――

ペレグリー：U. M. N. は？

オペレーター：はっ、ハイパースペース内を移動中のところまではトレースできましたが、

ポイント 2100-783 のところでロストしています。

同ポイントに局所変異の残滓が見られることから、グノーシスかと思われます。

ペレグリー：そう――

――だそうよ。

マーグリス：――

（またひとつ、手駒を失ったか――）